

槍の折れ

野村胡堂

—

「八、何処の帰りだ。朝っぱらから、たいそう遠走りした様子じゃないか」
錢形の平次はこんな調子でガラッ八の八五郎を迎えました。

「わかりますかえ親分、向柳原の叔母の家から来たのじゃないってことが」
八五郎の鼻はキナ臭く蠢めきます。

「まだ巳刻前だよ、良い兄さんが鬘節まげぶしに埃ほこりを付けて歩く時刻じゃないよ。それに氣組が大変じゃないか。叔母さんおばさんとこの味噌汁みそしるや煮豆にまめじゃ、そんな弾はずみがつくわけはねえ」

「まるで広小路に陣を布ぬいている八卦屋けやだね」

「それとも千住か板橋から馬でも曳ひいて来たのか」

「冗談じゃありませんよ、親分。二年前に死んだ人間が人を殺したんだ。小石川の陸尺町ろくしゃくから一足飛びに飛んで来ましたぜ」

「二年前に死んだ人間が人を殺した？」

「その上まだまだ四五人は殺してやるといふんだから大変で——」

「誰がそんな事を言うんだ？」

「二年前に殺された人間ですよ」

「さア解らねえ、まア落着いて話せ」

「落着いて聴いて下さいよ親分、こいつは前代ぜんだい未聞みもんだ」

ガラツ八の持って来た話は、あまりにも桁外けたはずれでした。二年前に死んだ人間

が、予告して人を殺すということは、絶対にあり得べからざることですが、ガラツ八は自分の眼で、現にそのあり得べからざる事件を見て来たといふのです。

「小石川陸尺町ろくしゃく（安藤坂下——今の水道町）の成瀬屋なるせや総右衛門さうゑもんといふのを親分は覚えていてでしょうね」

「陸尺町の成瀬屋総右衛門——二三年前に御府内を騒がせた大泥棒蝙蝠冠兵衛こうもりかんべえを生捕って、お上から御褒美を頂いた家だね」

平次はよく知っておりまして。そのころ義賊しやうと称した泥棒で、その実、百両盗って、十両か五両を貧しい者に恵み、あとの大部分は自分の懐ろに入れた蝙蝠冠兵衛は、自分の良心あざむを欺いて、無智な世間の人気を博することと、いかなる締りも、なんの苦もなく開けて忍び込む天才的な術を心得ている点で、有名な男です。

その蝙蝠冠兵衛こうもりかんべえほどの強したたか者も、伝通院前の成瀬屋に忍び込んだ時は、取返しつかぬ失策をしてしまいました。

小石川切つての大地主で、巨万の富を積んでいる成瀬屋は、蝙蝠冠兵衛に狙

われると知って、屋敷の内外に鳴子を張り渡した上、幾つも幾つも罌わなを仕掛け、苦もなく忍び込んだ巨盜冠兵衛を生捕りにし、番頭で用心棒を兼ねた伝六という男が、さんざん冠兵衛をなぶりものにした揚句、半死半生のまま役人に引渡したのでした。

蝙蝠冠兵衛こうもりかんべえは間もなく鈴ガ森で獄門ごくもんになりました。生前の善根らしきもののお蔭で、助命の歎願などもありましたが、素よりそんなものは取上げられる筈もなく、一代の巨盜もそれっ切り江戸っ子の関心から拭い去られてしまったのです。

「——その成瀬屋総右衛門の家へ、二年前に御処刑おしおきになった蝙蝠冠兵衛が祟たるんだから変じゃありませんか」

「待ってくれ、そいつは捕物じゃなくて怪談だぜ、八」
平次は恐ろしく酔っぱい顔をしました。

「その怪談が大変なんで、一と月も前から成瀬屋の一家を塵殺みなごろしにするという蝙蝠冠兵衛の手紙が三本も来ているじゃありませんか」

「よくある術てだ」

「ところが、とうとうやりましたよ、親分」

「――」

「成瀬屋の用心棒――腕自慢の力自慢で、その上恐ろしく気の強い番頭の伝六が、見事に芋刺いもざしになりましたよ」

「殺されたというのか」

「寝ている心の臓をたった一と突きだ。グウとも言わずにやられたらしいんで」

「お前見て来たのか」

「恐ろしい手際だ。行って見ませんか親分」

八五郎が舌を振るって驚いているのです。

「よし行つて見よう。幽霊ゆうれいを縛るのも洒落しやれているだろう。案内してくれ」

「ありがたい、親分が動き出しや百人力だ。ところでこの佯ままじゃあつしの方が動けませんよ」

「どうしたんだ」

「まだ朝飯にあり付かないんで、——あわてて飛出したが、空すきっ腹に小石川は遠過ぎましたよ」

「馬鹿だなア」

八五郎のために遅い朝飯の用意をする女房のお静の後ろ姿を見ながら平次は苦笑しました。

ろくしゃく

陸尺町の成瀬屋へ行つたのは、もう昼近いころ、検屍万端済んでしまつて、お葬とむらいの支度に忙しい有様でした。

店の人達の白い眼の中に、土地の御用聞金富の留吉だけは、ホツとした顔で迎えてくれます。

「銭形の親分が来てくれさえすれば、亡霊も退散するだろう。こいつはどうも、あつしの手おに了えそうもない」

若い留吉は、よく己おのれを知つております。

「どうしたんだ、金富町の兄あに哥らしくもない。昔から下手人に足のなかつた例れいしはないよ」

平次ははなつからこれを生きている人間の仕業と見抜みぬいている様子です。

「だが、こいつは人間業じゃないぜ。戸締りは伝馬町の大牢たいろうのように嚴重だ、開いて居るのはお勝手の引窓がたった一つ。そんなところから出入りするものは、

烟と風だけだ」

「まア、見せて貰おう」

成瀬屋というのは、山の手きつての大地主で、この辺一带、旗本御家人の屋敷でなければ、成瀬屋の持地と言っても大した間違いのないほどでした。

主人の総右衛門は五七八の典型的な大旦那で、鬢びんの霜ほど世を経た、なんとなく抜目のないうちにも、人を外らさぬ愛嬌と、自然に備わる品位のある中老人です。

「これはこれは銭形の親分、飛んだお騒がせをいたします。——大泥棒を縛つて、御上の御手伝いをして、その泥棒に崇たたられたとあっちゃ、私も人様へ顔が合わされません。何分よろしくお願い申します」

こう言った態度で平次と八五郎に接してくれました。

成瀬屋の構えは、噂に聴いたよりも宏大で、近頃は庭に張り繞めぐらした鳴子や

毘わなは取払いましたが、戸締りの嚴重さと、奉公人の腕っ節の強さは、留吉が伝馬町の大牢と形容したのが、全く適切過ぎて滑稽こっけいなくらいでした。

番頭の伝六が殺されていたのは、店の次の間、大錢箱の前で、昼は恐ろしく薄暗いところですが、奥と店とお勝手との要衝で、支配人が頑張るには、いちばん都合の良い場所です。

通路は三方にある外に、この部屋から梯子で店二階へ登れるようになり、二階の手摺てすりから見下す形になります。尤も二階もつとと言っても物置同様で、誰も寝起きはしておりません。二三年前までは、奉公人の寝部屋だったのですが、伝六は夜半に便所に起きる奉公人達をうるさがって、裏の離室はなれに引越させ、その代り日用の雑器を詰め込ませておいたのです。

「此処でこう寝ているところをやられたんだが、——蒸し暑い晩で、胸まで抜け出して寝ていたにしても、寝巻の上から、槍やりの折れで一と突きに、布団へ通

るほどやったんだから恐ろしい力だ」

留吉は説明してくれました。六畳はまだ掃除そうじが済まなかつたものか、斑々はんはんたる血潮で、昨夜の惨劇さんげきがよく解ります。人間の通路を避けて、梯子段の下寄りに寝た伝七を、たった一と突きで、声も立てさせずにやったのは、よつほどの力と手際がなければなりません。

平次はその部屋を中心に、店へ、奥へ、お勝手へと探索たんさくの手を伸ばして行きました。

お勝手は田舎の台所ほどの広さで、締りは恐ろしく嚴重ですが、引窓が引き忘れたように開いております。牢屋のような締め切られた家で、ここだけ開いていたのは、『此処から入りました』と言う証拠しんこのようで、少し変でないこともありません。

槍の折れ

外へ廻まわって見ると、この間の嵐あらしの後で、屋根の漏もれを見た時の梯子が、そのま

まお勝手の横に掛けてあります。これも『此処から入りました』の証拠の一つです。

多勢の奉公人は、みんな離室に寝る中で、殺された伝六と、下女のお大だけは母屋おもやに寝るそうで、お勝手の締りはそのお大の役目でした。

「ゆうべ引き窓を閉め忘れたんじゃないか」

平次はやはりこう訊きく外はなかつたのです。

「飛んでもない、親分さん。私は二度も戸締りを見てから休みましたよ」

三十がらみの働きものらしいお大、躍起となって弁解します。

伝六の死骸は、殺された部屋の次の間に、傷口に繃ほうたい帯だけ巻いて移してありました。平次はいつもの慎つつしみ深い態度で——その癖恐ろしく念入りに調べましたが、顔の表情など至って穏かで、なんの苦悶くもんの跡も留めず、傷は左の乳の下を一と突きだけ、いかにも鮮あざやかな手際です。

凶器は恐ろしく変つておりました。それは三尺ほどの柄えを残した、笹穂ささほの手槍の折れ。

「フーム、こいつは恐ろしい道具だ」

平次はその斑々はんはんたる手槍の折れを眺めております。

「そいつは二階の長押ながしにあつたんだ。まだいろいろな道具があるのに、それを選び出したのは変じゃないか」

留吉も凶器の特異性には気が付いた様子です。

「二階を見ようじゃないか」

平次は先に立って、店二階へ登りました。ガラクタと言つても大家で、膳ぜん椀わんも布団も立派に使えるものばかり。土蔵へ行くのが面倒で、日用の雑器をここへ入れて置くのでしよう。その中に一つ、古い刀かた筆なだん笥すがあつて、中には長いの短ないの、いろいろの得物を取揃えてありますが、曲者がそんなものには眼もく

れず、長押なげしに埃ほこりを被つたまま掛け捨ててあつた槍の折れを持出したのでしよう。ほかに満足な槍が三筋、弓が二た張、矢が二三十本、これらはすべて、昔の豪族が、家の子郎党の手で自分の家を護つた時の遺風いふうらしく、いつでも取出せるように用意してあつたのでしよう。尤も槍はことごとく鞘をかぶせ、弓は二た張とも弦つるを外はずしてあります。

二階を見て居るところへ、主人の弟で豊次郎という中年者が入つて来ました。腰の低い四五六の男で、平次が望むままに、いろいろのことを説明もし、戸締りの具合なども見せてくれました。二階の戸締りも嚴重以上で、豊次郎に言わせると、掃除の時開けるだけ、それに恐ろしく嚴重な格子があつて、外から入ることなどは思いも寄りません。

伝六の殺された部屋は、四通八達の要路で、何処からでも入れますが、武芸自慢で、恐ろしく眼ざとい伝六が、二階から槍の折れを持出して来て、胸に突立てられるのを知らずにいるとは思われず、下手人はどうして凶器きょうきを持出したか、どうして伝六に近づいたか、それがいちばん興味のある疑問です。

「灯あかりは点いて居たんだね」

「へエ、——有明ありあけの行燈が、今朝まで点いておりました」

豊次郎は平次のために、行燈の位置まで指してくれました。

母屋に寝るのは、この外に主人総右衛門と女房のお早と伴の島三郎と、娘のお芳と、親類の娘のお町と、たったそれだけ、この顔触の中に、強したたか者の伝六を殺せそうなものは一人ありません。

お早は主人とは少し年齢が違い過ぎる位で、四十そこそこの女。板橋在の百

姓の出で、正直者らしい代り、慾は深そうです。これは何を訊いても一向要領を得ません。

伴の島三郎は二十歳、少しは帳場も手伝いますが、これは氣も弱そうで、人などを殺せそうもありません。その妹のお芳は十八の恐ろしく色っぽい豊満な娘。兄の島三郎とは反対に、氣力も健康も溢れておりますが、伝六とはなんの關係がある筈もなく、もう一人親類の娘というお町は、日蔭の花のような二二三の美しい女ですが、一年の半分は床の上にいる病弱で、現にこの一と月ばかりは、持病の癆咳ろうがいが重くなつて、三度の食事も床の上に運ばせております。

「やはり外から入ったんだね」
留吉はそう極めております。

「いや、金富町の親分の前だが、あの引窓を外から開けて入れる道理はない。あつしは下手人は内の者だと思ふが——」

ガラツ八は柄にもない抗議を持出しました。

「家の者なら、もう少し人間の入れそうな場所を拵こぎえておくぜ」

「――」

留吉の言うのは尤も至極でした。下手人が若し家の中の者だとすると、外から入れそうもない引窓などを開けておくより、お勝手口なり縁側なりに、外から入ったような細工さいくをして、雨戸の一枚くらいは開けておくべき筈です。

「それに曲者は、ゆうべ戸締りをする前――夜のうちにそつと潜り込んでいる術てもあるぜ」

「逃げる時は、あの引窓から出たというのか」

ガラツ八、大きく開いたままの引窓を見上げました。

「そんなことは御座いません。戸は明るいうちに締めてしまえますし、寝る前には私か伝六が、家中を見廻ります」

主人にそう言われるとそれまでです。ガラツ八や留吉の世帯と違って、金持にはまた金持らしい、しんけいしつ神経質な用心のあることを、二人ともよく心得ていたのです。

「引窓は閉つていても、外から入れないことはないよ」

今まで黙つてあちらこちらを調べていた平次は、こんなことを言いながらみんなの前に顔を出しました。

「縁の下は駄目だぜ、銭形の」

先刻さんざん縁の下を覗いて歩いた留吉は、苦笑いをしております。彼の頭は蜘蛛の巣だらけだったので、

「縁の下じゃない。——引窓から入れると思うんだ。八、そこを締めてくれ」

「外から開けるんですか、親分」

「手加減なんかしちやいけないぜ、確り締めてくれ」

引窓の綱を絞って、嚴重に結ぶのを見て、平次は外へ出て行きました。

まもなく、お勝手の横に掛けてあつた梯子はしごを登って、平次は屋根の上に立つた様子です。引窓は外からキシみます。平次は何やら隙間に差し込んで、その隙間を少しずつ少しずつ大きくしております。

嚴重ゆわに結えたようでも、引窓の綱にはかなりの弛ゆるみがあり、上からコジられる毎ごとに、隙間は少しずつ大きくなって行きました。やがてその隙間からスルスルと伸びて来た鳶とびぐち口が一梃、ガラッ八が念入りに縛つた引窓の綱の——土竈へつついの上の折釘のところの——結び目に引つ掛ると、なんの苦もなく解いてしまったのです。

引窓はサッと開いて、平次の笑った顔が、大空を背景に頭の上に現われました。

「あッ」

驚く人々の前に、引窓の綱を伝わった平次は、なんの造作もなく軽々と飛降りて居たのです。

「やはり此処から？」

「いや、これも一つの術だ。——が、此処じゃあるまいよ」

「？」

平次はこの素晴らしい発見を忘れてしまったように、クルリと踵きびすを返しました。

四

平次の仕事はひとわたり家の内外を見ると、次には死んだ巨盗蝙蝠冠兵衛こうもりかんべえの脅迫状きようはくじょうを見せて貰うことでした。

「そいつは主人が預っている。先刻検屍さつきのとき、同心の内藤さんが眼を通して、後で取りに来るからと、主人に返した筈だ」

留吉に言われて、主人の部屋に通ると、

「その手紙はここにございますよ」

主人は気軽に立って棚たなの上の手箱を開けました。

「あッ」

立ち縮すくんだも道理、手箱の中には、一と掴つかみの灰だけ。確かにそこへ入れた筈の、巨盗の手紙三本は、煙の如く消えてしまったのです。

「どうした」

留吉も八五郎も覗覗きました。

「無い。——確かにここへ入れた筈だが、なくなってしまうましたよ」
分別者らしい総右衛門も、さすがに顔色を変えます。

「そんな筈はあるまい」

「でもこの通り、箱は空っぽになって、灰がひと握り——」

銭形平次はその騒ぎを後ろに聴いて、そつと廊下に出ました。店の方には奉公人や近所の衆が、多勢で騒いでおりますが、ここはひっそりと静まり返つて、廊下にも庭にも人影はなく、少しばかりの植込を隔てて、恐ろしく高い塀が、物々しい忍び返しを見せて突つ立っております。

平次は遠慮もなく次の部屋の障子をサツと開けました。

「あッ」

物に脅おびえたように、思わず立ち上がったのは十七八の娘、見る人によつてはずいぶん美しいとも言うでしょう。脂肪質の豊満な肉体と、娘々したあどけなささがが妙に人を引き付けます。

「お嬢さん、ちよいと見せて下さい」

平次はざつと部屋の中を見廻して、父親の部屋に通ずる堺さかいの唐紙などを動かしたりしております。部屋の中には鏡台が一つ、火鉢が一つ、針箱が一つ。あとには何んにもありません。

「あの——」

娘は何やら物言いた気ですが、何に脅おそえたか、また口を緘しぎしてしまいました。

「お嬢さん、なにか知つてることがあつたら言つて下さい」

平次はそれへ誘さそいをかけましたが、一度緘しぎされた娘の唇は、容易に開きそうもありません。

娘の部屋の隣りは納戸で、納戸の先は暗い四畳半。そこに親類の娘というお町が、長い癆咳ろうがいを患わずらつて寝ているのでした。

「御免よ——」

スツと不遠慮に入つた平次。部屋の中の薬臭いのに、さすがに顔を反そむけまし

た。

「――」

黙って見上げた病人の眼は、不思議に活々と光っております。

二十三というにしては少し老けて、病苦のやつれが頬を刻んでおりますが、蒼白い顔は名工の鑿のみの跡あとが匂うよう。赤い唇も、少し殺そげた顎あごも、異様な上品さをさえ添えるのでした。

「どうだ、気分は」

「ありがとうございます。この通りで、皆さんに御心配をかけております」
痛々しく伏せた眉、臍ろうたけく霞かすむのも不思議な魅力でした。

「ちよいと脈を見せてくれ。――いや右じゃない左だ」

平次は病人の枕元に踞しゃがむと、柄にもなく脈などを取りました。痩せてはいるが美しい腕です。

「へエ、——親分が脈を診るんですか」

ヌツと顔を出したのはガラツ八でした。

「黙っている、医者や易者の心得もなきや御用は勤まらないぞ」

「へ——ツ」

八五郎は引っ込みのつかない様子で突っ立ちました。苦笑いを殺した唇は歪みます。

「ところで、お前はここの主人と、どういう関り合いになるんだ」

平次は娘の枕元に坐り込んでしまいました。

「——私は、あの、先代の成瀬屋の血統の者でございます」

「ホ——ツ」

変な声を出したのはガラツ八です。

「成瀬屋の先代が身代限りをしそうになったのを、遠縁の今の主人が入って立

て直し、私は孤児みなしこになつてさるお屋敷に奉公していたのを、ここに引取られて育てられました」

お町の調子は淡々としてなんの抑揚よくようもありません。

「皆んなはお前によくしてくれるか」

「それはもう、三年越わすらし患わづらっている私を、こんなにお世話して下さいます。なんの不自由もございません。勿もつた体たいないほどこで」

お町は枕の上に顔を伏せて、何やら念じている様子です。

「主人はどうだ」

「あんな良い方はございません。慈悲深い、思いやりのある方で、町内でも評判でございます」

それは平次も聴いておりました。善根を積むより外に余念のない成瀬屋総右衛門の評判は、神田あたりまでも響いていたのです。

「子供たちは？」

「島三郎さんはお店の方が忙しい様で、——よく働きます。お芳さんは本当に良い方で」

「お神さんはどうだ」

「正直一途ずの方でございます」

これは大した褒めようもなかったのでしょう。とにもかくにも、成瀬屋の家族に対する、お町の感謝と好意には疑いありません。

五

巨盗の幽霊の手紙は、明かに紛失ふんしつしましたが、さいわい総右衛門が文句を暗くらんじているのと、留吉が筆跡や紙をよく見ておいたので、大体のことは平次に

も想像がつかます。

手紙は三本とも、外から店に投げ込まれたもので、いずれも半紙を八つに畳んで結んだもの。中はかなりの達筆で、『二年前生捕られて散々なぶりものにされた上、役人に引渡された怨みを陳べ、この妄執を晴らすため、成瀬屋の者を一人一人、残らず殺してやる』と言った凄まじいことが、少しくどい調子で書いてあるのです。

「筆跡ひっせきは？」

「堅い字でした。今時あんな字を書く者は滅多にありません。女子供やお店者たなものの筆跡てじゃございません」

総右衛門は言うのです。

「紙は？」

「ただの半紙だ。——何処でも売っている」

留吉が応えます。

「店へ投り込むのは、どんな時だ」

「朝早くか、夕方——薄暗くなつてからでございませう。誰か気が付いて拾ひましたが、投り込んだ者の姿は見たものもございませう」

「御主人の弟——豊次郎さんとか言つたね、あれは本当の弟じゃあるまいね」

「義理の弟でございませうよ。私の先妻の弟で」

「子供さんたちは」

「みんな本当の子でございませう。今の家内の生んだのばかりで、——倅はよく店を手伝つてくれますが、娘は唯もう我倅わがままを言うばかりで」

その我倅が可愛くてたまらない様子です。

「誰かに怨まれている覚えはないだろうか、金のこと、縁談のこと、公事くじ、揉もめ事ことなど——」

「なんにもごさいません。金も少しは融通ゆうずうしておりますし、土地も家も人様に貸しておりますが、無理な取立てはいたしません。縁談もまだ決った口がないので、心配しております」

「あのお町——という娘は？」

「この成瀬屋なるせやの先代の娘でございます。成瀬屋が没落ぼつらくしたとき、少しの縁故をたどって、さる大名屋敷に奉公に出ておりましたが、五年前私が引取りました。先代への義理でございます。精いっぱいちの養生はさせておりますが、何分あの通りの病気で、その上遠慮深い性たちで、思うようになりません。町内の本道（内科医）は病気は大した事はない、気の持ちようでは丈夫な身体になれると申しますが、本人は気が挫くじけて、寝たり起きたりでは、弱る一方でございます」

総右衛門の言葉には少しの暗い影もありません。

平次も八五郎も留吉も、突っ放されたような心持で、庭先に顔をあつめまし

た。ここからは小石川牛込一帯の低地を眺めて、なかなかの景色ですが、そんなものは素より眼にも入らず、巨盜蝙蝠冠兵衛こうもりかんべえの亡霊だけが、三人の胸の中に、次第に現実味を帯びて生長して行くのです。

「親分、あの娘が変じゃありませんか」

「誰だ」

「お町とかいう、病人の——」

「——」

「親分は脈なんか見たでしよう、掌てのひらに灰が附いてやしませんか」

「大笑いさ、あの娘の掌に灰が附いて居さえすれば、物事は一ぺんに片付くよ。」

ところがそんなものはないよ、嘗なめたように綺麗だ、右と左と念入りに見たんだから間違いはない」

平次は医者 of 真似などをした間の悪さに、一人で苦笑いをしております。

「お芳の方は」

「これも綺麗だ——が、綺麗過ぎたよ、洗ったばかりなんだ」

「洗ったばかり？ あの娘の部屋を捜さがしましうか、三本の手紙はどこかに隠してあるに違いない」

「止せ止せ。手を洗う隙がありや、三本の手紙くらいはどこへでも隠せるよ。」

若い娘に手荒なことをするでもあるまい。それよりお前は念入りにあの娘を見張っているが宜い。きつと何か変わったことがある」

「ここに泊り込んでですか、親分」

「俺から主人へそう言つてやろう。脅おびえ切つているから、喜んで泊めるだろう

よ」

それは平次の予想通りでした。蝙蝠冠兵衛の脅迫きょうはくはまだ果たされたわけではなく、この上の用心にガラツ八が泊つてくれるのは、成瀬屋に取つてはこの上も

ない心丈夫なことだったのです。

六

「親分、なんにも変わったことはありませんよ」

ぼんやり八五郎が帰って来たのは、それから五日も経った後でした。

「ところが此方には変わったことがあるよ」

「何です、親分」

「蝙蝠冠兵衛の倅が捕まったよ」

「へエ——」

「幸吉と言つて、こいつは親に似ぬ堅い男だ。浅草で小商こあきないをしているのを手た繰ぐつて、二日前に金富町の留吉あにい兄哥が挙げて来たよ」

「それで、やっぱり成瀬屋の引窓から忍込んだのはその野郎で——」

「それが分らないのさ。留吉兄哥はそう決めているようだ。が、幸吉はあの晩女房といっしょに家にいたというんだ。女房といっしょじゃ信用が出来ないと留吉兄哥は言うが、どうも嘘らしくないところもある。——それに、外から曲者が入ったとすれば、二階の長押なげしからわざわざ槍の折れなんか取出したわけが分らなくなる」

平次はすっかり考え込んでしまいました。その時——。

「お手紙ですよ」

二人の沈思ちんしを破って、平次の女房のお静は顔を出します。襷たすきをはずして、手拭を取って、軽く八五郎に目礼しながら、何時までも若くて美しいお静の濡ぬれた手には、結び文が一つ。

「何処で、それを」

「井戸端へ小僧さんが持って来ましたよ。十四五の、それは可愛らしい」

「八」

「よし」

八五郎は飛んで出ましたが、その辺にはもう小僧の姿の見える筈もなく、野良犬を蹴飛ばして、張板を二三枚倒して、八五郎はぼんやり戻って来ました。

「見えませんよ、親分」

「まあ宜い、どうせお前に捕まるようなどじじゃあるまい」

「どじの中だから、あつしのようなどじにも捕まるだろうと思ひましたよ」

「洒落を言うな、馬鹿馬鹿しい」

平次は手紙を開きました。何の特色もない半紙に、右肩の上がった四角な字で、

倅幸吉には何の罪も無之、飽までも成瀬屋を怨むは此冠兵衛

に候。その証拠として近々一家を塵みなごろしに仕る可く随分要心堅固
に被遊あそはさるべ可く候 頓首

蝙蝠冠兵衛 亡霊

錢形平次殿

斯んな人を嘗なめたことが書いてあるのです。

「八、こいつは大変だ」

平次は顔色を変えました。

「脅おどかしじゃありませんか、親分」

「いや、——脅かしなら宜いが、——幸吉を助けるつもりで、何をやり出すか分らない」

「？」

「幸吉は挙げられている。——成瀬屋あだに仇あだをするのが幸吉でないという証拠は、

幸吉がいない時、なんか凄いことをやるに限るだろう」

「へエ——」

ガラッ八も次第に呑み込みます。

「ところが、下手人げしゅにんの素姓が今のところまるっ切り分らない。幸吉でないとする——」

「やっぱり冠兵衛の幽霊？」

「馬鹿な事を。幽霊が人を殺せる道理はない」

「でも、あの槍の折れを胸に打ち込んだのは大変な力ですぜ」

「大変な力だ。人間業わさではむずかしい。が、やっぱり二本足のある人間の仕業だ」

「そいつを捜し出すには、どうしたものでしょう」

「成瀬屋の家の者を皆んな洗え。主人夫婦を怨む者はないか、奉公人の身持、

倅と娘の縁談、あのお町という娘のいた大名屋敷、先代の成瀬屋の没落ほつらくした時の様子、殺された番頭伝六の身持、身寄——」

「それから」

「そんな事で宜い。下っ引を存分に狩り出して、一日か二日の間に、手の届くだけ調べ抜いてくれ。どんな事が持上がるかも知れない」

平次は残る隈くまなく手を廻して、さて一人になって静かに考えました。こう相手の素姓が分らないと、幾通りも可能の仮定を築きずき上げて、下手人の姿を描き出す外はありません。

いや、平次は不可能な事をさえも仮定して、伝六を殺し得る相手を考え出すとして居るのです。

七

「さア、大変ッ、親分」

ガラッ八が飛込んで来たのは、それから三日目の朝でした。

「どうした、八」

今度ばかりは平次も、それを真剣に受けて起ち上がりました。二三日憂鬱ゆううつな考えに閉とじされながら、何時八五郎に脅かされるかも分らない心持で、この報告を待っていた平次だったので。

「成瀬屋の麿殺みなごろした」

「何？」

「今朝の味噌汁でやられましたよ。主人もお神さんも、伴も娘も、ことに親類のお町などは九死一生の騒ぎだ」

「行って見よう」

平次とガラッ八は、伝通院前まで飛んだことは言うまでもありません。

成瀬屋は死の淵に崩れ落ちるような恐ろしい混乱でした。店は閉めたまま、奉公人たちは足音を忍ばせ、声を殺してただウロウロするばかり。奥では主人夫婦、倅、娘、お町の五人、枕を並べて唸うなっているのです。

一番重態なのは病弱なお町で、いちばん軽いのは主人の総右衛門、その口から平次はいろいろの事を引き出しました。

中毒したのは奥で食事を摂とった五人だけ、奉公人たちは皆けろりとしておりますが、その中でたった一人、主人の弟の豊次郎が、何の異状もないのが人目につきます。

「私は店の用事で朝の食事が遅れました。これから始めようとすると、皆んな苦しみ始めたんで、これはいけないと思って止しましたよ」

そう聞けば何の変哲へんてつもありません。

集まった医者は三人。三人とも口を揃えて毒は裏庭に今を盛りと咲いてい
とりかぶと
 る鳥冠の根を味噌汁へ摺り込んだものと分りましたが、誰がそんな事をしたの
 かととなると、まるで見当も付かないのです。

下女のお大は当面の責任者ですが、唯おろおろするばかり、裏の方へなにか
 入って来たので、味噌汁を仕掛けたまま一度見に行つたとは分りましたが、そ
 のあいだお勝手に入つて、鍋の中へ毒を仕込んだ者は誰かととなると、そこま
 で分りません。

裏庭へ行つて見ると、なるほど鳥冠の花が美しく咲き乱れておりますが、こ
 の根にそんな猛毒があることは、一般に知られていないことでもあり、たくさ
 んの鳥冠の中にたった一本根を痛められた様子で枯れかかったのはありますが、
 それとても何時、誰がやった事やら、奉公人たちに訊ねても分る道理もない有
 様です。

その日は騒ぎに暮れて、病人は医者の手まかに任せたまま、平次はともかくも引揚げました。金富町の留吉が、豊次郎を挙げそうにしましたが、『まだ早い』と目顔からで合図をして、辛くも思い止まらせたりしました。

神田の家へ帰って来ると、八方に出した下つ引が、いろいろの情報を集めて二三人待っています。

「親分、あの主人の弟の豊次郎というのは太い奴ですよ。——妾めかけなんか困って、恐ろしい馬鹿を尽しているが、店にいと猫かぶを被って、神妙な顔をしてやがる。

兄の金をどれだけ費い込んでいるか分りませんよ」

——と一人。

「殺された伝六はひどい奴で、成瀬屋の先代に奉公人とも居候ともつかずに入り込み、人の良い先代を騙だまして、とうとう身代限りの目に逢わせ、首まで縊くらせた上、今の総右衛門を伴れ込んで、自分が采配さいはいを振っていたそうですよ」

——と次の一人。

「あのお町という娘は感心な娘で、四五年前までさるお大名に奉公していたが読み書きから武芸まで一通り以上出来る上、女ながら弓が名誉で、総右衛門が引取ると言ったとき、奥方がたいそう惜しがったということですよ」

こんないろいろの情報の中から、平次は自分に必要な材料をかき集めているのでした。

「親分」

最後に飛込んで来たのは八五郎です。

「なんだ、八」

「お町は今晚中保もたないかも知れませんが、町内の本道（内科医）が、この娘の病気は大して重くはなかった。本人が気が弱くて一日の半分は床の上にいたが、それでも弱った身体だから、毒にやられては——とたまりもない——という

んで」

「病気は大して重くはないと言ったな」

「え、——それが、乱暴じゃありませんか、今朝に限って若い娘の癖くせに、味噌汁を二杯も替えて喰べたそうで」

「病人が、味噌汁を二杯？ よし、行こう」

「何処へ行くんで、親分」

「お町に逢っておきたい。死なれちゃ大変だ」

宵よいも夜中もありません。平次とガラツ八は、そのまま小石川陸尺町ろくしゃくまで飛びました。

成瀬屋に着いた時は、平次が恐れたように、お町はもう頼み少ない姿で、医者もすっかり匙さしを投げ、時の経つのばかり待っておりまして。

「ちよいと、お町に話したいことがある。みんな遠慮して貰いたいが——」

平次はお町の部屋から人払いをした上、隣の部屋に八五郎を頑張らせて、さて、病人の枕元に近づきました。

「お町、——望み通り、お前は助かるまい。こうなつては隠すことはない筈だ。皆んな話して、心持を軽くしてはどうだ」

「ありがとうございます——親分さん——実は——」

「よしよしお前は苦しそうだ。俺が代つて懺悔ざんげしてやろう。違つたところを、お前ただが訂すが宜い」

平次の言葉が優しく静かにひびくと、お町の熱を持った眼は、大きくまたたくのでした。瘦やせた頬に鼻の美しい影が落ちて、痛々しいが、この上もなく静寂な上品さです。

「お前は伝六を怨うらんだ。そして成瀬屋一家の者を怨んだ。お前の父親をむずかしい公事くじ（訴訟）に引入れて没落ぼつらくさせ、首を縊くるような目に逢わせたのは、伝

六と総右衛門の悪企わるたくみだと知っていた——」

「お町の眼は又またたきます。それはジツと苦悩を堪こらえた、世にも痛々しい——
——が、美しい眼でした。」



©2017 萩 袖月

「お前は慈悲善根を売物にしている総右衛門に引取られるまま、この家へ入り込んだ。父親の敵を討つつもりだった。幸い総右衛門は、罪亡ぼしのつもりでお前によくしてくれるが、伝六はお前というものを眼の敵にした。そこでまず伝六を殺すことを考え、二年前にここで生捕られて刑死した泥棒の冠兵衛の名を仮りて手紙を書き、あの小僧に店へ投げ込ませた。冠兵衛の名を借りたのは方便だが、お前は亡くなった父親の敵を討つつもりだったに相違あるまい」

「お前は病気で弱っているように見せかけたが、見かけほどは弱っていなかった。お勝手の横に梯子はしごのある日を見定めて、引窓を開け、あの晩は自分の部屋に入つて寝ていると見せかけて、宵のうちから店二階に入つて隠れていた。――

「お前の部屋など、夜になれば覗いて見る者もなかったろう」

「夜中になると、予て見定めて置いた長押ながおしの槍の折れを取つて、お前は弓で階下の伝六の胸に射込んだ。恐ろしい力で布団まで通つたのはそのためだ。――弓に弦つるを掛けるのがさぞ骨が折れたことだろうが、お前は死物狂いでやってのけた」

「――」
お町の眼は力なくまたたきます。

「冠兵衛の偽手紙を、主人の手箱から盗ませ、代りに灰を入れたのは、お前がお芳おとを脅かしてさせたに相違あるまい。あれは見かけより賢くない娘だ」

「――」
「冠兵衛の伴の幸吉が縛られたと聞いて、お前はそれを助ける気になつた。そして、成瀬屋の一家の者に思い知らせて自分も死ぬ気になつた。鳥冠とりかぶとの根は予かねて庭から掘つて用意して居た筈だ。下女のお大がお勝手をあけると、お前はそ

れを鍋なべに投ほうり込み、自分が一番先に死ぬ気で二杯も重ねた。——お町、まだ訊きたいことがある、あの小僧は誰だ、あの小僧は——」

錢形平次は驚きました。平次の言葉を静かに聴き入っているうちに、お町の眼の色が次第に力が失せて顔には死の色がサツと刷はかれて居るではありませんか。平次の声に驚いて多勢の者が飛込んで来ましたが、死んで行く娘の命をどうする事も出来ません。平次は少し引き下がったまま、両掌りょうてを合せて静かに静かに念仏を称となえておりました。

窓から射し入る秋の暁あかつきの光が、息を引取った娘の顔を、美しく神々しく照し出します。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「文藝讀物」昭和十八年十一月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第七卷 河出書房 昭和三十一年八月五日初版



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>